

●朝倉雅彦インタビュー

東京の図書館振興を  
体現した人

# 朝倉 雅彦

東京では、都立図書館の再編、

区立図書館の業務委託、

館長・職員の世界交替などの課題に直面している。

公共図書館は難しい時代になったようだ。

そんな今だからこそ、

図書館が立ち上がっていった過程を再確認したい。

振り返ってみれば東京の図書館振興のエボック自体が、

たった四〇年前、三〇年前の出来事なのだ。

今回は、当時都立百比谷で振興策の企画に関わり、

三多摩で実践を続けた証人―朝倉雅彦氏を招いた。

●構成 齋藤誠一

●聞き手

蛭田廣一

●ひるた・ひろかず  
小平市中央図書館

齋藤誠一

●さいとう・せいじ  
立川市中央図書館・本誌編集委員

堀 渡

●ほり・わたる

国分寺市立志ヶ窪図書館・本誌編集委員

齋藤● 本日は、遠くからお越しいただきありがとうございます。

私が朝倉さんにはじめてお会いしたのは、府中市立図書館長をされていた時代です。府中の図書館でアルバイトをさせていたのだこうと思ってお尋ねした時です。もう三〇年くらい前になります。たいへん気さくで情熱の塊という印象をもちました。今日は、朝倉さんの図書館に対する情熱の原点や図書館に対する思いをお聞きしたくて、このような場を設定いたしました。どうかよろしくお願いいたします。

## ふるさととは 鹿児島の花岡

齋藤● まず、お生まれは何年ですか。

朝倉● 大正一五年（一九二六年）です。

齋藤● ご出身はどちらですか。

朝倉● 九州の鹿児島県の花岡です。鹿児島には薩摩半島と大隈半島とあるんだけど、大隈半島

のほうです。桜島のあるほう。ふるさとの地形を申し上げますと、丘陵地帯なんです。平地とか川は全然なくて、文化的、あるいは経済的な面からすると、不毛の地帯なんです。だから今も変わっていません。

ただ、そういう所であるだけに、江戸期は軍事上の要衝の地だったんです。薩摩と大隈の境なので、薩摩藩主の島津の分家がわしの田舎に大隅の目付けのために城をつくっておられた。それでちっちゃな、城下町というんじやなくて、花岡という城下集落になったんですね。鹿児島の島津さんのお城は鶴丸城といってるんだけど、わしの田舎の島津さんのお城は、鶴の羽のお城で鶴羽城といっていた。

明治の廃藩置県で、この花岡の島津さんもみんな東京へ行っちゃった。それで、お城の跡に小学校ができた。校門の表札には、鶴羽小学校、鶴羽城跡という二つの表札がかかっています。それがちよっぴり誇りかな。誇りといえば、なんといっても、小学校の裏山の城山と呼んでいたところなんです。一〇〇メートル

ぐらい登ったところが山のとつべんで、そこから鹿兒島四方が一望できるんです。目の前には鹿兒島湾が長く横たわって見えるし、対岸には薩摩半島がずーっと見える。その南の端に薩摩富士といわれる開聞岳。南を見ると、大隈の平野が一望でき、東側を見ると高隈連峰。北には、煙を吹いている桜島が目の前にあるわけです。だからやっぱり見張りのよくきく場所ということ、島津さんがお城を置かれたんだなとつくづく思います。

天下の絶景だから、一緒に行つて見ていただきたいぐらいです。ね。東京へ出てきてあつちこつちに出かけるけど、あの絶景に勝るところには、お目にかかったことないものね。わしにはおふくろと同じですよ。喜びにつけ悲しみにつけ、この自然の絶景が懐でくるんでくれる。いつも思い出すわけです。それがいわゆるふるさとのあらましです。一つだけつけ足すと、さつきいった花岡島津家の一番の末裔が島津久基しまづひひもと「注01」という方で、一世代前の人には、高名な源氏

物語の研究者として知られていきます。岩波文庫の源氏物語を見ると、島津久基注と書いてある。齋藤● そうですか。

朝倉● 小学校の時、その島津久基さんが墓参りに帰ってこられて講演されたことがあります。だけどその頃は話の自身は全然分らない(笑)。それが幼少時代、唯一の文化的なことだったのかな、と思いますね。

## 学校の焼け跡で考えた 哲学の命題

齋藤● 中学校では、どんな生徒だったんですか。

朝倉● 海軍航空隊のある鹿屋という町に中学校があつたもんだから、自分のうちから約一〇キロの道を通いました。中学校時代に、仲間内でよく読んでたのは、夏目漱石の『坊ちゃん』なんですよ。山の奥で蛮行に生きがいを感じているでしょう。それを教科書にして、蛮行していた(笑)。それはね、年とつてみると、よかつたですよ。あの蛮行が。だから大人になつても、蛮行、時々やつちや

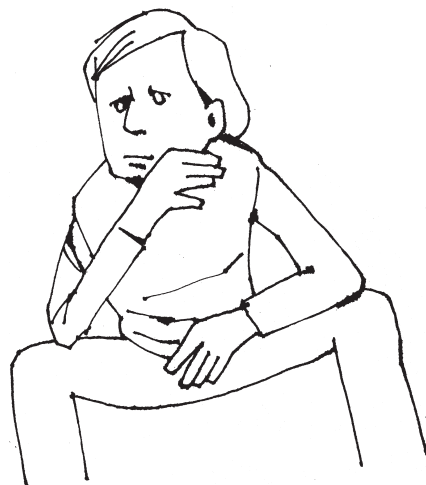
うんです。

その時の仲間で親友の一人が、海軍兵学校に行きました。『ずぼん』の先号に出つた栗原均さんが海軍兵学校だったでしょう。実は、その親友と栗原さんはクラスメイトなんです。世の中、狭いなと思うよね。

齋藤● 高校時代はどのように過ごされたんですか。戦争と重なりますか。

朝倉● 昭和一九年(一九四四年)に鹿兒島市内にある高等学校に行きました。さつきいきました鶴丸城の跡に学校があつたのですが、桜島が正面に見えるいい場所。そこで全員、寮に入るわけです。寮というのは一年生が大部分んだけど、リーダーとして三年生、二年生もいて、その先輩たちが我々にいろいろなことを教えてくれるわけです。入つてまもなくの夜の学習の時、黒板に推薦図書をずーっと書いてくれた。

一番最初に書いたのが、出隆という人の『哲学以前』(一九二二年)。それから倉田百三の『愛と認識との出発』(一九二一年)、同じく『出家とその弟子』



【注01】島津久基

1891～1949年(明治24～昭和24)。大正から昭和時代の国文学者。鹿児島県出身。東洋大学教授をへて、1943年(昭和18)母校東京帝大の教授となる。古代・中世の伝説・説話・物語文学の研究にとりくみ、とくに「源氏物語」の研究にすぐれた。

【注02】杉捷夫

1904～1990年(明治37～平成2)。新潟県生まれ。フランス文学者。1945年(昭和20)立教大学教授。1949～1964年(昭和24～39)立教大学教授。1969年(昭和44)日比谷図書館長となる。

【注03】東龍太郎

1893～1983年(明治26～昭和58)。大阪出身。ロンドン大学に留学し体育生理学をまなぶ。1934年(昭和9)母校東京帝大の教授。戦後は厚生省医務局長。日本のスポーツ医学の草分けで、日本体育協会会長、IOC委員をつとめた。1959年(昭和34)東京都知事となり、東京オリンピックの開催に尽力。

【注04】小尾犀雄

1907～2003年(明治40～平成15)。山梨県生まれ。東京の府立高等女学校教諭、教頭をへて東京都視学となる。1960年(昭和35)東京都教育長となり東京都方式の勤務評定、文部省全国一斉学力テストの実施に尽力。また高校入試に学校群制度を導入した。

【注05】井上靖

1907～1991年(明治40～平成3)。北海道出身。小説家。1950年(昭和25)『闘牛』(1949年刊行)によって芥川賞を受賞。1976年(昭和51)文化勲章受章。1981年(昭和56)第9代日本ペンクラブ会長に就任。

【注06】秦豊吉

1892～1956年(明治25～昭和31)。三菱商事に勤務する傍ら、レマルク著『西部戦線異状なし』(1929年発表)を翻訳する。『西部戦線異状なし』は、新潮文庫で1955年(昭和30)に発行された。その後、東宝に入社し日劇ダンシングチームを育て日本にショービジネスを根付かせた。

【注07】『中小レポート』

日本図書館協会に設置された中小公共図書館運営基準委員会が、各地の中堅図書館員多数の協力を得て2年余の実地調査と討論を重ね、1963年(昭和38)に公刊した『中小都市における公共図書館の運営』の通称。公共図書館の役割を民主主義の基礎をなす知的自由の保障に置き、「中小公共図書館こそ公共図書館のすべてである」というテーゼのもとに、資料提供、館外奉仕の重視、住民の支持を得る活動を裏付ける図書費の確保など、多くの斬新な課題提起をしている。

【注08】『市民の図書館』

1970年(昭和45)に日本図書館協会から刊行された。『中小レポート』の内容を一步前進させて、公共図書館活動の当面の重点を①貸出、②児童サービス、③全域サービスにおき、個人貸出と児童奉仕の

(二九一六年)ね。阿部次郎の『三太郎の日記』(二九一四年)ついでいうのもありました。それから和辻哲郎の『風土』(一九三五年)。これは今日でも現役じゃないですか。それと岩波文庫では、『若きウエルテルの悩み』(ゲーテ著、一七七四年)とか、『アルト・ハイデルベルク』(マイヤー・フェルスタ著、一九〇一年)これらは必読書です。『カルメン』(メリメ著、一八四五年)もありました。『カルメン』の訳者が、のちに日比谷の館長になられた杉捷夫さん

すよ。だから、杉さんが館長になった時は大喜びだったわけですよ。あ、あの時の先生か、ということだね。学生時代にかえつたみたいだった。昭和二〇年(一九四五年)の一月になって、熊本の飛行機工場に学徒動員でひっぱられた。だから、高校には九カ月しかいないわけ。それで工場に三カ月いたら、召集令状をもらった。赤紙をね。その時のシヨックついでうのはなんともいえなかったです。ね。まだその時一九歳だったから。恋もしてなかったわけですよ(笑)。一九で恋もして

したね。それで四月に鹿児島の上五連隊に入隊ですよ。入隊しましたら、紅顔可憐の陸軍二等兵。上官が、お前たちは沖繩の特攻隊だつていうんです。満一九歳で「特」に来てもらったとか何とか、そんな言い方をするんです。覚悟はしていたものの、あと一週間で特攻隊で行かなくちゃいけない。ところが一週間が経つたら、また同じ上官が、この前、沖繩の特攻隊だつていったんだけど、実は沖繩までいく船が一艘も無い。だからお前たちは薩摩半島の南へ行つて、アメリカが上陸してくる時の陣地づくりをやってくれと。それで薩摩半島の南

端まで行つたんです。そこで毎日穴を掘つてね、その頃はたたくましい体になっていました。一間ぐらいの皮付の松の木の丸太を裸でかついでいました。それと平行して軍事訓練もやっていました。例えば、戦車に見立てた大八車が走ってくるのを目がけて、その両輪の間に、砂をつめた木の箱を投げ込む。自爆ですよ。そうこうするうち八月で終戦を迎えたんです。なんか生きているというのが不思議でしょうがなかったです。鹿児島ですから、すぐ復員できましたので、早速自分の学校を見に行つたんです。そしたら空襲でやられちゃって、何も無い

んです。学び舎も寮も何もない。焼け跡だけです。

その時ですよ。人間っていろいろはいつたい何だ、と思っちゃったね。なんでこんなことをしなくちゃいけないんだ、ってね。それから、この先どんな生き方をしたいか、どうしようと思っちゃいました。住む家はなし、食う飯はなし、着るものはなし、読みたい本もなし、それに国までも。我々の世代っていうのは、なんにもない中に放り出された。人間とは何だろうか、いかに生きるべきかというこの二つが、その時から今日まで、一番心の底にある哲学の命題なんです。兵隊時代に飛行機の監視に立っていたら、わしの真後ろからグラマン戦闘機が、バーツと音を立てて、わしのすれすれを機銃掃射したんです。真っ赤に焼けた機関砲の弾が、箒の先のように。あれがもう一〇センチ寄っていたら、だめでした。そういう有形無形の死線っていうのは二〇歳までにくっついてくるわけです。本当は死んでたのが、神様がまたくださった命だと思ってる、そういう世代です。

朝倉雅彦(あさくらまさひこ)

1926年(大正15)鹿児島県に生まれる。

1960年(昭和35)東京都立教育研究所に勤務。

1963年(昭和38)東京都教育庁文化課、

1966年(昭和41)東京都立日比谷図書館

(現在の都立中央図書館の前身)

庶務課企画係長を経て、

1971年(昭和46)府中市立図書館長兼郷土館長。

1986年(昭和61)退職。

1988年(昭和63)杉並区立郷土博物館長に囑託として就任し、

1996年退職。

1980～2000年(昭和55～平成12)まで

武蔵野女子大学、亜細亜大学、青葉学園大学にて

非常勤講師として教鞭をふるう。

その他、東京都市町村立図書館長協議会会長3回、

杉並区立図書館協議会委員、

文部省社会教育審議会図書館分科会委員、

日本図書館協会監事、同出版流通委員会委員を務める



## アラビアで学んだ ものの見方

齋藤● そのあと東京にいらしたんですか。

朝倉● その次に行ったのは、京都の学校です。京都は焼けていなかった。それはいいんだけど、経済的には非常に不活発なわけです。東京のほうは丸焼けだったから、経済的な活動は活発だった。京都はおとなしすぎた。その頃、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』をもじって、「若き飢えてるの悩み」って、そういう言葉が流行ってね。京都には、その飢えた思いが残っています（笑）。

重視、図書館とは建物をさすのではなくサービスの組織を意味することを明らかにした。

### [注9]佐藤政孝

1925~2004年(大正14~平成16)。大分生まれ。東京都立日比谷図書館奉仕課長、庶務課長、東京都教育庁青少年教育課長、計画課長、東京都立中央図書館管理部長、日比谷図書館長を経て、1982年(昭和57)東京都杉並区立中央図書館長。

### [注10]乾勝

1955年(昭和30)に東京都職員になり、教育庁学務部、総務部に勤務。その後、目黒区立守屋図書館長に着任し、都教育庁の社会教育部長、福利厚生部長などを務める。

### [注11]美濃部亮吉

1904-1984年(明治37~昭和59)。東京出身。法学者である美濃部達吉の長男。大内兵衛に師事。1934年(昭和9)法大教授となるが、人民戦線事件で退職。戦後は東京教育大学教授、行政管理庁統計基準局長をつとめ、1967年(昭和42)東京都知事に当選。いわゆる「革新都政」を3期にない、公害対策、福祉政策をすすめたが財政悪化に苦しんだ。1980年(昭和55)参議院議員。

### [注12]前川恒雄

1930年(昭和5)生まれ。小松市立図書館、七尾市立図書館を経て、1960年(昭和35)日本図書館協会。1965年(昭和40)日野市立図書館長。「市民の図書館づくり」の先駆。日野市助役。滋賀県立図書館長、甲南大学教授。

### [注13]東京都の図書館振興策

1970年(昭和45)、他の自治体に先がけて東京都が行った図書館振興策。図書館設置を促進するための財政支援は、多摩地域の図書館建設を活気づけた。専門職制度の確立も大きな柱であったが結果として実現されなかった。

### [注14]森耕一

1923~1992年(大正12~平成4)。鹿児島出身。1952年(昭和27)和歌山県立医科大学図書館課勤務。1953年(昭和28年)日本図書館研究会理事。天王寺図書館館長、大阪市立図書館長を経て、京都大学教育学部助教授。1971~1982年(昭和47~昭和57)日本図書館協会常務理事。

### [注15]イギリスの図書館法

大英博物館に勤務していたエドワード・エドワーズ(Edwards,E)が誰でも自由に利用できる公共図書館の設置を主張。その主張が下院議員エワート(Ewart,W)によって取り上げられ、1845年、イギリス議会は公共図書館建設のために課税する権限を市参事会に付与する法律を通過。1850年図書館法成立。

### [注16]エドワーズ(Edwards,E)

1822~1886。エドワード・エドワーズ。1845年のイギリスの図書館法の立役者。1852年、図書館法によって開館したマンチェスター市の館長に就任。

そういう中で、スタンダールの『赤と黒』(一八三〇年)にのめり込み、赤シャツと黒ズボンで得意になっていた時代だった。そして、学問の自由の雰囲気だけは学んだ。それで、そのあと東京に本社がある石油を運ぶタンカーの会社に入りました。石油関係の会社ですから当然石油の勉強しなくちゃいけない。世界の石油の生産地やその流れなど勉強しました。それはやはりよかったです。国際情勢の背景には、必ず石油問題があります。今のイラクだって、背景は石油ですからね。だからその時の勉強しているのは、そういう国際情勢の理

解に今も非常に役立っているわけです。それともう一つは、新任研修でアメリカ航路とアラビア航路のどちらかに希望して行けたんです。わしは大のロマンチストですから、文句なしにアラビア航路を選んだ。その頃はアメリカ行きは新造船です。一方、アラビア行きは、戦時中につくって沈没したのを引き揚げて修理したものだった。それでも二万トンあったのです。やっぱりロマンチストだからそういう船がまたよかったです。それで往復二カ月。まだ講和条約締結前だったから、上陸はできない。行った先はアラビアのラス

タヌラという岬。そこへ横付けして、パイプとつないで、原油を積み込むわけです。一晩で満タンにして、あくる日は帰途に着くというものでした。その時たった一日いただけなんです。街が望遠鏡で見た。荷役の人たちは頭に白いターバンを巻いて、白い腰巻をしている。足は素足です。それであの熱射の砂漠の砂を踏んでいるのです。それは、びっくりしました。素足なんだけれども、顔は大統領じゃないかというくらい立派でした。そしてその人たちは、日の入り、日の出の三〇分ぐらい、数千年前から続いてい

るお祈りをやっているわけ

す。石油という時代の先端をいくものと数千年前からの宗教が同居している。ものの見方というのが非常に勉強になりました。

齋藤●今につながりますよね。

朝倉●ええ。昔から、バルカンの火薬庫といわれていたのが、いまだに続いている。宗教と石油の戦いです。この会社に勤務したのはわずかだったんだけど、そういう意味ではいろんな勉強をさせられた。

ものを考える時、まず海外のことを考えるわけです。図書館についても海外のことが気になりました。むこうはどうだろうって考えるわけです。それはやはり、あの時アラビアまで行ったということが土壌にあるんだと思います。

その時だけは片言の英語で話したんだけど、やっぱり鹿児島なまりが入りつつあったらしい(笑)。

## FM放送局の申請書を 一カ月で作った

齋藤●そのあと、図書館と関わ

りをもたれたんですか。

朝倉●図書館の前史があるんです。都の教育庁に入り、昭和三五年(一九六〇年)に都立教育研究所勤務になった。その時の研究所は、今の都立中央図書館がある場所です。

齋藤●有栖川宮公園ですね。

朝倉●そこに勤めた最後の年、新研究所の建設計画を担当しました。その研究所にFMの教育放送局を持つという話になったわけです。長野県のある市がそういう放送局を持っている例があるから、東京だって持たなくちゃってことで始まった。それが四月。その当時、東京タワーに空気が一局分だけあって、それを目指してもうすでに六〇社が申請している、と。そのあとを追いかけろということで、わしに申請書を一カ月で作れというわけです。締め切りは六月。常識じゃ考えられないですよ。でもやり遂げましたよ。一番苦労したのは番組作成ね。それから一年間の予算立て。それから放送局の配線図。そんなのできっこない。

でも、やはりそういう時は助け

てくれる人がいる。東京タワー

の要職にある方にこれこれだと話したら、それはいいことだというわけです。自治体がFMの放送局を持つということは大事だ。例えば非常災害の時など、放送局が役立つんだからというわけです。その方が一所懸命バックアップしてくれて、配線図もほとんどつくってくれました。それから申請書を出すところが関東電波管理局なので、そこで予算などを教えてもらったとして、作成したんです。教育委員会のオーケーをもらって、いよいよ知事決裁のところまでいったら、「待て！」というんです。放送時間の半分をくれ、あとは知事部局で全部引き受けるから、といってきた。こっちはわーつと喜んだ。これがそのまま許可にでもなってみなさい。今度は放送局をつくる仕事をやらなきゃならない。それをやったら死ぬと思っていたので、ほっとしたわけです。それでバトンタッチした。そのあと放送局がどうなったかは、もう覚えてないです。

## 東京都交響楽団を つくれ!

朝倉●それで三年間の教育研究所の仕事を終え、そのあと異動した先が、教育庁の文化課でした。これも運命の辞令でしたね。そこで、名部長だった山本さんという人に呼ばれた。山本さんは、その後新宿区長を長くやられた方なだけで……。なんで課長じゃなくて部長がまだヒラのわしを呼ぶんだろうと思っ行った。そうしたら、君に来てもらったのはなあ、東京都で交響楽団をつくらうと計画しているんだ、それを君にやってみてほしい、というわけです。わしは腰ぬかして、音楽なんてなんにも知りませんといった。私の音楽といたら小学校一年の時に習った『ちいさいばつば』と、『鹿児島小原節』なんです。交響楽団なんて、それだけは勘弁してくださいっていった。そうしたら、今夜一晩考えてみるっていうわけ。考えれば考えるほど、これは断ったほうがいいってことで(笑)、あく朝すつとんで行ってね、夕べ一晩中考

えたんですけど、ほかの仕事  
だったらなんでもやるけど、こ  
ればかりは勘弁していただき  
たい、っていった。そうしたら、  
大物だったんですね。アッハッ  
ハって大笑いされるわけ。それ  
で、だからお前にやってくれっ  
ていつてるんだ。お前にバイオ  
リン弾いてくれていつてるん  
じゃない、楽団をつくるのはお  
前みたいに音楽の「オ」の字も  
知らないのがいいんだ。なま  
じつか知っていると、その人の好  
みが出ちゃって偏つたものがで  
きちゃうって。そういわれると  
分かったような気持ちにだんだ  
んなってきた、つい、それでは  
やらせていただきますってこ

#### [注17]ノーテ

17世紀、フランスマザラン文庫の文庫  
長。27歳の時に『図書館建築のための意見書』を著し、近代的な図書館思想の先  
駆となる。敬虔なカトリック教徒であ  
ったが、異端の書といえども図書館の中に  
正当な位置を確保されるべきであると主  
張した。

#### [注18]横佐知子

現存するわが国最古の医書『医心法』、難  
解ゆえに幻の書といわれた各地の豪族・  
神社に伝わる医薬処方を集めた日本最  
古の医薬事典『大同類聚方』の解説で知  
られる。『大同類聚方』は1986年(昭和61)  
菊池寛賞、1987年(昭和62)エイボン功  
績賞受賞。

#### [注19]清水正三

1918~1999年(大正7~平成11)。1938  
年(昭和13)東京市立日本橋図書館、淀  
川、江戸川、京橋各図書館、都立中央図  
書館等。1976年(昭和51)立教大学教授。  
『中小レポート』の責任者。

#### [注20]文部科学省の望ましい基準

図書館法の第18条「文部科学大臣は、図  
書館の健全な発達を図るために、公立図  
書館の設置及び運営上望ましい基準を  
定め、これを教育委員会に提示すると  
もに一般公衆に対して示すものとする。」  
に基づき、平成13年7月、文部科学省大臣  
告示「公立図書館の設置及び運営上の望  
ましい基準」が定められた。

#### [注21]『図書館人生劇場』

1999年(平成11)に朝倉さんが作った小  
冊子、脚本「市長との対話」と、「図書館人  
生小唄」の歌詞が収録されている。脚本  
「市長との対話」の登場人物は、市長と図  
書館長の二人。市長から教育委員会の教  
育次長のポストに就く気はないかと打診  
された図書館長が、「三十年来、図書館た  
だ一筋に生きて参りました」と辞退する。  
市長も図書館長の気持ちを理解し、杯を  
かわすというストーリー。

とになっちゃった。  
それからが修羅場の三年間でし  
た。行政マンでそんな仕事を  
やった人はほかにはいない。楽  
団員の選考や楽器の購入は他の  
人がやったけど、その他の一切  
をわしがやったわけ。大変でし  
た。筆舌に尽くせないとは、こ  
ういうことだと思えます。毎晩  
一時の終電まで働く日が続い  
て、一時でも終わらなくて、部  
長室のソファに何十晩寝たか分  
からないです。一人でやるのだ  
からそれくらいやらないと楽団  
ができるはずないです。この三  
年間で生涯の中で一番の修羅場  
でしたね。それで三年目の秋に  
やっと楽団が誕生した。その時

の話は話せばいくらでもあるん  
ですけど、一つだけ。楽団がで  
きた時、楽団からすばらしいも  
のをもらったんです。  
齋藤● 何ですか？  
朝倉● その交響楽団のバッジ。  
楽団員と事務局員は全員、持つ  
てるものです。わしがどんな活  
躍をしたか、事務局員も全部  
知ってるからくれたんです。う  
しろに番号がついてる、一〇〇  
ね。

齋藤● 一〇〇番。

朝倉● 一番は、知事の東龍太郎  
さん「注03」。一番を東さんに  
あげたのは、東さんの命令でつ  
くることになったから。

というのは、海外での国際会議

#### 参考文献

- 『世界大百科事典 第2版』(平凡社)
- 『現代日本人名録 2002』(日外アソシエーツ、2002年)
- 『日本人名大辞典』(講談社、2001年)
- 『現代社会と図書館』(佐藤政孝著、樹村房、1985年)
- 『図書館ハンドブック 第5版』(日本図書館協会、1991年)
- 『図書館運動は何を残したか 図書館の専門性』(葉袋秀樹著、勁草書房、2001年)
- 『ず・ぼん⑨』(ポット出版、2004年)
- Webcat Plus <http://webcatplus.nii.ac.jp/>

に出かけると、だいたいどこも  
午前中は会議をやって、午後は  
その町でバックアップしている  
博物館の見学、そして夜になる  
と衣替えして同じく町でバック  
アップしているオペラか、オー  
ケストラの観賞だった。それな  
のに、東京にはなんにもない  
じゃないか、両方ともつくれ、  
となつたんです。  
齋藤● それで東知事が一番なん  
ですね。  
朝倉● そう、一番は東さん。そ  
して、楽団をつくるためにそれ  
こそ身をなげうった朝倉さん  
に一〇〇番をあげる、って。  
齋藤● それはすごい(笑)。  
朝倉● 楽団では二〇〇番ぐらい





東京都交響楽団から朝倉さんに贈られた設立記念のバッジ。  
バッジの裏には100番の数字が

までしかつくってないんだから、切れのいい番号っていうのは二つしかないわけですよ。

だから都響の演奏会は、バッジをつけて行けばフリーパス。だけど、わしは五分ともたない。いい演奏ほどわしが寝るのも早い（笑）。上野の文化会館は二五〇〇人くらい入りますが、演奏の時はちりが一つ落ちてもわかるくらいシーンとしていく。そこでいびきでもかいたら、ぶち壊しですよ（笑）。一回だけ聴きに行ったんだけど、それからはいわく一度も行ってない。

## 文化行政に関心を 持つようになった

朝倉● それで、初公演もすんですっかり喜んでいたら、たいへんなことが起きたんです。ちょうどその夏、東京は水飢饉だったんですね。それに金もあまりなかった。

齋藤● それは何年ですか。

朝倉● 昭和四〇年（一九六五年）。九月から一〇月にかけて、特別団体整理委員会というのが

できたんです。少しでも財源を確保しようと各種の団体をなくしちゃうか、うんと縮減しようとしたわけ。

それでその整理の対象にできたばかりの楽団を入れたんですよ。腹がたちましたね。やつと集めた六〇名の楽団員、ドイツからも呼んでいる。楽団がおしまいになったら、その人たちはどうなるんだと、こっちは必死ですよ。その審査が始まった時に、都のほうから委員会室に行ったのは、小尾庸雄さん「注04」という有名な教育長さんとわし。相手は社会党の議員だった。

その時、開口一番にその議員がいうには、水飢饉の今日ですよ、楽団なんか金を出すとはなにぞとぞつて（この背景には、親方日の丸の楽団なんかできたら民響はメシの食い上げではないか、ということがあったんですね）。そこでわしは、すかさず小尾教育長にメモを書いて渡した。「およそ行政には、物の行政と心の行政がある。この両者のバランスが取れてこそ最高の行政なんだ。この楽団は心の行

政の核心になるものだ」って。そうしたら教育長はその通りいった。すると、議員はなんにもいなくなっちゃって、それでおしまい。正論で意表をついた言い方をしたから、むこうもとっさになんともいなくなってしまう。水の話でもすると、水掛け論でいつまで続いたか分からんけど（笑）。とにかく、それで楽団は生き延びたわけです。

齋藤● それが朝倉さんの文化論の基礎にあるんですね。

朝倉● そう。日比谷公園の公会堂でやっている水曜コンサートは、公園思想の普及ということ。で明治から公園課がやっている、それがずっと続いている。また都民文化祭は広報室でやっている。考えてみたら、都に一貫した文化行政はなかったわけですよ。では国はといえば、国もやはり同じ。

楽団が安心してやっていけるってことは、文化行政があつてこそなんだと。それがきっかけで、わしは文化行政に非常に関心を持つようになった。それで、わしは文化行政の組織の案をつ

くったのです。楽団を助けたいためにね。その時に図書館、博物館のこともだいたい考えた。そうこうしているうちに、三年経って、運命の辞令を昭和四一年（一九六六年）の四月一日付でもらうんです。

## 東洋一のライブラリー 日比谷図書館への辞令

朝倉● 研究所の放送局の申請から、楽団づくり、図書館と続いているわけですよ。やはりなんかのつながりがあった。全部、広い意味の文化的な一連の流れがあると思える。

齋藤● その時が、日比谷図書館の企画係長という辞令なんですか。

朝倉● わしはそれまでヒラだったんですが、昇格したわけです。楽団の功績をかってくれたと思ってます。

わしはこの時のことを考えると、あの辞令というのは、都の教育委員会からもらったんじゃない。運命の女神からもらったんだと、本当にそう思ってる。

もし、ほかの辞令をもらっていたら、今どうなってるだろうと思うんです。やはり運命の女神はわしを見込んで、日比谷図書館の辞令をくださった。いつ考えても、そう思うんです。

辞令をもらった時に、すぐ頭に浮かんできましたのは、蛮行に生きがいを感じた中学校時代（笑）。一年の時、英語のリーダー（笑）。一年の時に、英単語が十ぐらい並んでいた。その一番最後が日比谷ライブラリー（Hills Library）だったんです。

英語の先生が東京から着任されたばかりの方でした。その先生が、この図書館というのは東洋一の図書館で、毎日多くの人が来て勉強している。中学校のあった鹿屋の町にはその頃図書館なんかありません。だから、図書館というものがあるなど知らなかった。それで、図書館の存在と東洋一の図書館が日比谷ライブラリーだとその時覚えて。だから辞令をもらった時、あの時の日比谷ライブラリーかと思つて、興奮しましたね。あとで聞いたんですけど、わしは日比谷図書館に勤務するように

なつたと聞いた昔の蛮行の仲間が、あの野蛮な朝倉が日比谷図書館に入ったそうだと、いったいどうなつちやうなんだよと、だいぶ心配していたようです。

それで、図書館に入ったら、講義が連日続いてね。その時の企画係の司書の皆さんはわしの恩師ですよ。皆さん優秀で、生徒も優秀だったから（笑）、ピンポイント入つちやつたわけです。図書館というのは、自分が利用している時にはそんなに感じなかつたけれど、改めて客観的に見るとすばらしい所だと思つた。人間とは何ぞや、人間いかに生きるべきか……、一九歳の時、鹿児島学校の焼け野原に立つて感じた哲学の命題に答えてくれる所が図書館だと思うようになったわけです。あの万巻の書を見て興奮し、図書館にいての本は読まなくてもいいだけで命題が解けるような思いがしました。

ました。そこで、運命の女神がくださった辞令のわけが分かるようになり、ここに骨をうすめられればなあと思うようになりました。

ちょうどその頃、井上靖「注05」と秦豊吉「注06」という二人の作家のエピソードを知ったんです。井上靖は、毎日新聞の優秀な記者だった。また、記者をしながら作品を手がけつた。ちょうど四〇歳になつて記者で行くか、作家で行くか悩んで、義理のお父さんに相談したそうなんです。そうしたら「人間、四〇歳までが勉強だ、四〇歳になつたらその勉強を生かして、やりたい仕事に打ち込め」ってお父さんはその一言だけをいわれた。井上靖はもう何のためらいもなく作家の道を選んで、それから優秀な作品をたくさん書いたわけです。

それから『西部戦線異状なし』（レマルク著、一九二九年）の名訳をした秦豊吉。彼は三菱商事の優秀な社員で、ベルリン支店に勤務していた。『西部戦線異状なし』が当りに当たつて、空前のベストセラーになると、



秦さん自身は一所懸命本業のことを考えているんだけど、次のベストセラーを考えてるんだらうと、傍から見られている気がして全然仕事にならない。そこで思い切って三菱商事を辞めて、四〇歳の時に作家の道を選んだ。

わしが日比谷図書館に異動になった時がちょうどその年だった。不惑の年。だけどわしとしては不惑どころか……。ハンス・カロツサというドイツの作家の『美しき惑いの年』という作品があるんだけど、わしはその作品のタイトルが好きだね。あの時はわし自身がその『美しき惑いの年』だった(笑)。そんなことで、大きな節目が不惑の年の一枚の辞令ですね。

## 日本の図書館の現状が分かる位置だった

齋藤● 当時はどんなお仕事をしていましたか。

朝倉● わしが担当していたのは、日比谷図書館の企画の仕事です。その時の大きな企画としては、都立の新図書館、今の中

央図書館の建設です。

それから東京都には昭和三二年(一九五七年)に司書、司書補の制度が置かれていたが、その日比谷の職員もそろそろ係長とか管理職の試験を受ける時期になってきた。そこで、司書職の館長までの昇進などの制度を日比谷独自でつくって承認してもらおうとしていた。わしは、この制度づくりは直接担当はしなかったけれども。

それから、日比谷図書館協議会の事務局を担当していました。あとは、図書館関係団体の事務局の仕事です。東京都公立図書館長協議会が一つ。それから、日本図書館協会の公共図書館部会の事務局。他にも、関連して文部省や国会図書館との折衝もしていました。

それで、わしも司書資格をとらなくっちゃと、東洋大の夜間の講習に通ったわけ。だけど、それだけ仕事をやっちゃったら、遅くまで仕事が毎日続くわけです。とても講習には行けなくなっちゃった。楽団に次いで、修羅場みたいになっちゃった。その代わり、仕事で図書館の勉強

をガツチリさせられたというこ  
とでしようね。

わしが日比谷にいたのは、『中  
小レポート』（一九六三年）「注  
07」が出て三年目から『市民の  
図書館』（一九七〇年）「注08」  
が出た頃まで。日本の図書館の  
旧時代から新時代への脱皮の時  
代。胎動の時代。いや、疾風怒  
濤の時代といった方がいいか  
な。

全国の多くの館長さんと会いま  
したよ。すると司書職の話に触  
れるわけ。そうすると、東京都  
さんがやってくれば、おれの  
町なんかすぐできるんだってみ  
んなわしにはつぱかけるん  
です。あの時代というのは、よま  
につけ悪きにつけ、すべて東京  
を見習えだった。それで、司書  
職の設置というのは東京だけの  
問題じゃなくて、全国の図書館  
の問題なんだってことが分かっ  
た。だからこれはなんとしても  
実現しなくちゃと思ったわけ  
です。

部省の社会教育課の図書館関係  
の担当ともよく会った。だ  
から国の動向だつて分かる。日  
比谷にはたった五年間いただけ  
なんだけど、大変な勉強をさせ  
られた。

齋藤●昭和四二年（一九六七年）  
に東京都公立図書館長協議会  
長名で「都区立図書館の司書職  
制度確立に関する要望」という  
要望書が出ますね。多分、佐藤  
政孝さん「注09」と企画係長の  
朝倉さんが、ある程度まで苦勞  
をされてつくられたものなのだ  
ろうと思うんですが。

朝倉●その要望書ができた時、  
わしは日比谷図書館に入つて二  
年生だったんです。この時は佐  
藤さんは日比谷にいなかった。  
これは東京都公立図書館長協  
議会で進められました。ただ、わ  
しはこの事務局員だったので流  
れを知る立場ではあった。  
要請書はこの館長協議会の司書  
職制度小委員会で具体的に進め  
られた。その小委員会の昭和  
四二年度（一九六七年度）の委  
員長が、日黒の守屋図書館長の  
乾勝さん「注10」。当時、若手  
でありながら優秀でした。実務

力もあるすばらしい方ですよ。

乾さんは、優秀な方だから問題  
の核心をいち早く飲み込み、燃  
えられたんですよ。一〇〇%実  
現できると確信をもってあの要  
請書をつくった。やはり頭のい  
い人というのは問題点がさつと  
分かつて、すぐああいうのが書  
けて、ただちに行動に移すわけ。  
すばらしい方ですよ。

要請書ができ上がると、乾さん  
は執行の委員長になって、実際  
行動を始めたんです。議会や知  
事部局への要請は館長協議会の  
会長、副会長が行ったんだけど、  
乾さんは、一番難しい実施の担  
当課長。なかなかオーケーとい  
わない。こんなことをほんの  
一、二回でオーケーなんかする  
はずはない。一〇回以上です。  
担当課長のところに行くたびに  
事務局に顔を出しておられたか  
ら。乾さんはこの難物の担当課  
長をその熱と尽力によって、つ  
いに説得したんです。  
ある日、乾さんが「朝倉さん、  
今日一緒に行こうや」っていう  
わけ。その日が課長に話す最後  
の仕上げの日だったんですね。  
で、ついて行った。話しとった

ら、担当の課長が立ち上がつて、  
「労働組合がオーケーしたら  
ゴーしよう、進めよう」といつ  
た。

齋藤●労働組合がオーケーした  
らゴーしよう？

朝倉●そう。担当の課長がそう  
いったので、乾さんは難関を通  
り抜けたとホツとした。あとは  
組合がオーケーすればいいわけ  
だから。それで、今日は乾さん  
がわしを生き証人ということ  
で連れてきたんだと、わしはやつ  
と分かったわけです。乾さんは  
もうこの世におられない。この  
ことを知っているのはわし一人  
になっちゃった。

その時、わしは日比谷の二年生  
だったが、要請書に関しては、  
二つだけ関与した。一つは今お  
話した生き証人。もう一つは、  
この司書職制度は、全国の課題  
だと分かっていたので何として  
もこの実現を願つて『図書館  
雑誌』（一九六八年八月号）に「区  
立図書館に司書職を」を猛勉強  
して投稿した。わしの小論第一  
号です。

葉袋秀樹さんは、この当時の状  
況を多年にわたり詳細に調べら

れ、労作『図書館運動は何を残したか―図書館員の専門性』(勁草書房、二〇〇一年)にまとめられた。この中で、わしの四〇年前の風化寸前の小論に陽の目を当ててくださった。感激しました。

そのあと今度は、大沢正雄さんが「大沢正雄六十年代の東京の図書館を語る―葉袋秀樹『図書館運動は何を残したか―図書館員の専門性』をめぐって」(図書館問題研究会東京支部、二〇〇三年)に、わしの小論の全文を添付資料としてとりあげてくださった。司書職制度の実現に繋がることになればと嬉しかったです。

## 司書職制度の成立は 図書館の二〇世紀 最大の課題だった

齋藤● 結局、要請は成立しなかったんですけども、成立した場合には現在どうなっていたとお考えですか。

朝倉● 成立って、司書職制度がオーケーになって、できていたら？ これはもうわしがいうま

でもない夢の世界ですよ。図書館が近代化して盤石な本物の図書館となり、本格的な発展をしていたでしょう。コンピュータを入れれば事務の近代化とはいえようが、図書館の近代化では決してない。

さっきいきました通り、全国の館長さんとしょっちゅう会ったでしよ。東京さんがやってくればね、おらの町はすぐできるんだとこういつていた。全国の土壌はできていたんです。だから区にできたらね、波及効果で多摩地区にもできるし、それからどんどん全国に広がっていく。今、全国に図書館は三〇〇〇館近くあるんですか。

齋藤● はい。

朝倉● そうしますと、二〇世紀末にはそのほとんどが司書館長ですよ。それから、ほとんどが司書職員だ。これを考えてみなさいよ。圧巻じゃないですか。結論からいうと、図書館の二〇世紀最大の課題だったと思っっています。二一世紀になっても、日本の図書館というのは近代化されていない。もちろん一部には

制度として司書職を置いているところがありますけどね。当然のことですが、すばらしいことです。

当時、「今進めなければダメだ」と思っていた。なぜなら、乾さんというすばらしい委員長がいたということと、それを受けてオーケーをした相手の担当課長もすばらしい人だったということ。ちやうど西郷隆盛と勝海舟の会談みたいでした。それから、その両巨頭と美濃部亮吉都知事「注11」という大巨頭の三巨頭がそろったこと。明治以降の図書館の歩みを見ると、図書館にもバイオリズムがあることが分かった。このピークとは行政が純粹に図書館のことを進めてくれた時です。三巨頭がそろったこの時も一つのピークだったんです。

美濃部さんは日比谷館長にフランス文学者の杉捷夫さんを招かれ、あの図書館振興策を命じられた方です。

だから、わしは担当課長が起案してあげると「えっ！ まだだったんですか」といって、ボンとハンコを押される美濃部さ

んの姿を夢見ていた。途中で反対する者なんか誰もいやしない。美濃部さんまで行ったら、すぐオーケー。だから組合がオーケーしとつたら、一〇〇%実現しとつた。そんな簡単にオーケーなんかするはずはないと、どこかに書いてありましたけど。

## 当時の多摩地域の図書館

齋藤● 日比谷のあと、昭和四四年（一九七一年）に府中の図書館に行かれましたよね。どういふ経過で行かれたんですか。

朝倉● はっきりいって二つあります。

前任の館長さんが、都の教育庁の社会教育課出身の安井さんという方だった。その方が定年で辞める。それでその後任にどうだろうかと都の教育庁の方からいわれたというのが一つ。それから、もう一つは、府中に高原さんがおられたからです。

齋藤● ああ、府中市立図書館の高原安一さんですね。

朝倉● 昭和四四年だったか、松

江で公共図書館部会の大会があつて参加したの。その頃は夜行列車を利用して行つた。寝られなくて廊下に出たら、すぐ隣に立派な好青年が一人立つとるわけです。やはり寝られないということだね。それで挨拶をしたら、府中の高原ですと。高原さんも、わしと同じく大会に参加されようとしていた。それが高原さんとの出会いなの。それで、府中の話があつた時に、待てよと。府中といえば、あの時の高原さんがいるところじゃないか。高原さんと一緒にできるんだつたら行つてもいいなと、そう思った。

齋藤● また運命の女神ですか。

朝倉● その通り。あとは運命の女神のお指図に従つた。

齋藤● 朝倉さんから見て、その頃の多摩地域の図書館というのはどんな印象でしたか。

朝倉● それは何といつても前川恒雄さん〔注12〕。日野はちょうど図書館の新時代ののろしを上げられた頃で、全国の注目を浴びておられた。

当時、日野の他に多摩地区で図書館があつたのは、調布、府中、

町田、三鷹、小金井。それに奥多摩町は町だけど持っていた。だから、前川さんに教わりながらも日野に負けるなと頑張つた。それで、地区としても注目されるようになったんですよ。

そういうことから、図書館のない町の人たちは、おらが町にも図書館をとつて、東村山をはじめ運動が盛り上がった。ちょうどこの頃、東京都の図書館振興策〔注13〕が実施され、たちまちにして多摩地区に図書館の花が咲いていったんです。熱気がありましたよ。

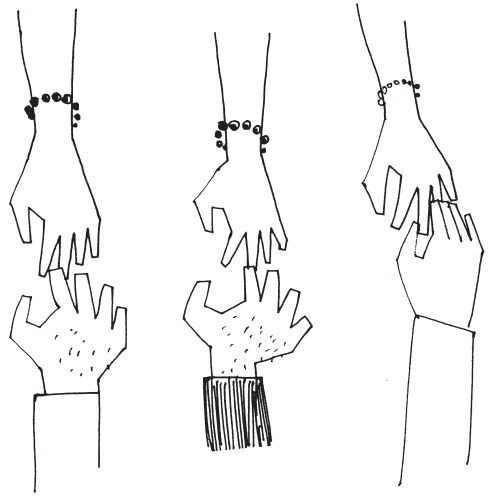
齋藤● 当時、前川さんのやつている日野の図書館が全国的に注目をされましたよね。移動図書館で回つて、貸出しを中心に動いていきますよね。

そこで今日は、小平市中央図書館の蛭田廣一さんにもお越しいただいています。蛭田さんは、永年小平市の図書館運営に携わり、特に地域資料サービスのスペシャリストであるわけですが、多摩地域の図書館活動を見てくださいか。

蛭田● いろいろな本や論文で紹介されている多摩地域の活動と

いうのは、ほとんどあの時代の日野の話だと思ふんです。『中小レポート』ができて『市民の図書館』を実践して、とにかく（移動図書館車）で貸出しを伸ばした。そういう活動があつたからこそ、全国に広まりをみせたというようなことがいわれているわけですが、私はそれはある意味で大事なところが何か抜けているんじゃないかなというふうに、ずつと感じていました。

多摩が神奈川県から東京都に移管されて一〇〇年になつた時（一九九三年）に、多摩一〇〇年史研究会というのができました。私もそのメンバーに加えていただいて、多摩の図書館史を自分なりに調べて書かなきゃいけないという状況になつた。学校で教わつてきたことだけではなくて、自分の目で見、自分の頭で考え始めた。その時に私が気づいたことは、今朝倉さんが説明してくれたことと全く同じなんです。その当時の多摩には日野にだけ図書館があつたんじゃない、府中にも、町田にも、調布にもあつた。そして、



それぞれの図書館がかなり活発に活動していた。それから、日野のやっっているいいところをそれぞれに取り入れながら、一方でなにくそ日野に負けないという気概を持っていた。そういうことを、すごく感じました。そういうものが、東京都の振興策に呼応して、各地域で図書館づくりをしていこうという動きにつながっていったんじゃないかと思うんです。それで、実際に一番大事なその時期に、日野とある意味では対極にある府中というところで館長をされた中で、日野と府中、あるいはほかの多摩地域の図書館というのはどのように違っていたのか。そのへんの具体的な話を少しおろかがいできたらなと思っただけです。

朝倉● たしかに日野のいき方は画期的でしたね。だがよく考えると図書館の基本論は共通しているのではないですか。各論になるとその図書館づくりは、図書館、行政、議会、市民の総合力で進められる。だから、ヴァリエーションが出てくるのじゃないかな。あと必要に応じて改

善されれば、それが自治ですよ。それでいいんじゃないかな。自治の国アメリカじゃ、それこそヴァリエーションに富んでますよ。

## 「図書館は人類の魂の宝庫」

わしの日比谷時代から『中小レポート』と『市民の図書館』は、バイブルみたいにいわれてきた。けどわしは図書館に入っただけで間もない頃だったから、図書館とは何か、なぜ利用が無料なのか、サービスとは何か、そういうことを学びたかった。それでね、わしのバイブルは大阪の森耕一さん「注14」の『図書館の話』の初版本（至誠堂、一九六六年）。ちょうどわしの日比谷に入った時に刊行された。わしには情熱の図書館論なんです。それに魅かれて……。「図書館」というのは人類の魂の宝庫だ」というのがライプニッツの図書館の定義ですね。ということになりませぬ。新鮮な驚きでしたね。魂がゆさぶられる

ほど感動しました。ライプニッツという人は、高名な哲学者だと思っていたので、それがどうして図書館のことをと不思議に思いましたね。それはすぐに分かりました。ライプニッツは司書の大先輩なんです。「図書館」というのは人類の魂の宝庫だ」というのは、哲学者で司書である最高の頭脳から生まれた定義です。とにかく図書館を一言で表しているすばらしい言葉だと思ふ。わしは今もそう思っていて、物を考える時にはすべてそこから出発している。

そのほかにイギリスの図書館法「注15」ができる時のエドワーズ「注16」ね。この人が書いた論文に国会議員の二人が共鳴して、三人で一緒になってあの無料の原則を盛り込んだ図書館法をつくったんですね。このエドワーズの情熱。それに図書館に殉じたフランスのノーデ「注17」などなど……。そのあたりを森さんの本で読むと感激しちゃうわけですよ。話が飛んでしまっても、ある時、図書館人が一〇人ぐらい集まったんです。その時、皆さ

んが、図書は情報だな、そう思う。わしは違うんじゃないですか、図書は魂の結晶じゃないですかといった。「これは書物じゃない、これに触れるものは魂に触れるのだ。」これはアメリカの有名な詩人、『草の葉』のホイットマンの言葉ですが、ライプニッツと全く同じですね。それでこのホイットマンの言葉をいったら一人が大笑いして、朝倉さんよ、あんたが知っているのは一〇〇年前の話だっているわけね。それで、わしは話をやめた。

図書が情報なら情報会社でやればよいと。図書は情報だという人には、「それでは、情報かどうか、一冊本を書いてみなさいよ」と。

図書館の本質はライプニッツの言葉通りだと思っっている。通俗的な言い方をすると、図書館は町の宝だと思っっているんです。使う人だけがその存在を認めるのではなくて、使わない人も図書館があるということを誇りに思うものでなくてはならない。

## みかんの木が 教えてくれた図書館に 必要な三要素

朝倉●肥料の三要素というのはご存知ですか。窒素、リン酸、カリね。窒素というのは葉肥という、葉っぱの肥ね。それからリン酸が実肥という、実の肥。それからカリが根肥、根っここの肥です。それぞれ役割分担があるわけです。

わしが学校にいた頃、親父が副業で小さなみかん園をやった。お前の学資を生み出すみかん園なんだから、休みで帰ってきたらみかんの手入れをしろっていう。それで、夏の暑い時、冬の寒い時にみかんの手入ればかりやったんです。その時、いかにすれば枝ぶりがよくて、おいしいみかんがたくさん取れるかをだいたい研究させられた。一番最初にやったのが、窒素。そうしたらみかんの木がすごい勢いで伸びた。そして、九月頃になると、伸びのいいつべんに花とちっちゃな実がいつぱいできるわけです。だけど鹿児島は毎年その頃、南から台風が吹

いてきて、みかんの木を直撃するわけ。そうすると花も実も、台風で全部落っこちちゃうんです。これが窒素だけの時。

それではと、窒素、リン酸、カリを三者バランスよくやるように考えた。そうしたら全然違う。台風が来ても落ちない。そして枝ぶりも形もよく、みかんは色もきれいでおいしい。

それで、私はやはり貸出しにウエイトをおくということは肥料の窒素みたいと思うわけ。見た目はいいんですよ。勢いよく伸びる。一時的にバーツと図書館が広がったように見える。それで貸出し論というのが図書館の正論だとみんな信者になっちゃった。それは物事の一部を見ていただけです。ある期間はそれでいいけど、実も花も落っこちちゃう。私はそう思う。

だから本当にいいみかんが取れるように図書館を育てるためには、リン酸もカリも必要なんです。リン酸というのは館内の利用、木の幹が図書の保存と考えると、木の幹が図書の保存と考えると、カリの根肥というのは行政、それからマスコミ、一般社会と考えればいいんじゃない

いかなと思う。行政と友好関係を結び、議員さんにも図書館を大事にしてもらおう。マスコミにも親しんでもらおう。

図書館は堂々たる生きものです。この必要な要素をバランスよく取り入れてこそ、よい実が実ります。実が結ぶまで三〇年かかります。自然の摂理を守るということですね。

人間の知識というのは何だつて役立つと思う。暑い時、寒い時、こんな仕事やらされてと思っただけど、それは図書館を考える時に役立つわけです。みかんの木が教えてくれた(笑)。そういうこと。

斎藤●おいしいみかんというのは、質のいいみかんとイコールなんです。

朝倉●そういうこと。質のいいみかんは、形がよくて、おいしい。

斎藤●朝倉さんの話を聞いていますと、どうも図書館の質の高まりを熱っぽく感じますが……。

朝倉●えっ！ これからおうと思っっていたことを先にいわれちゃった。斎藤さんにはもう



すっかり手のうちを読まれちゃったかな。

富士山を思い浮かべてください。見事な姿でしょう。高さと裾野のバランスがとれているから安定した見事さになるんですよ。図書館もまったく同じ。富士山はもうあれ以上高くも広がりもしない。けれども図書館富士は質が高まればバランスよく裾野も広がる。裾野が広がっただけでは高くはならない。この考え方はさっきのみかんの木が教えてくれたんです。わしは、この考えを図書館発展ピラミッドとして、項目の一つとし、昭和五六年（一九八一年）に『図書館雑誌』（日本図書館協会）にも載せたことがある。

市民の利用の質は、富士山型に高まるのです。それで利用の量を増やすにも質も対応して高めることというのがわしの考え。図書館は、これに対応する要素の体制がなくっちゃ。蔵書の構成、スタッフ、施設……。この図書館のバランスのよい三要素は、具体的にはアメリカの図書館で教えられた。

この要素は小さな分館ほどよく

わかる。それは、Circulation、Information、Reading Room or cornerのことですね。

「Circulation」は貸出しのことです。図書館の蔵書は市民の共有のもので、直訳すれば廻し読みです。担当はLibrary Clerkです。「Information」は相談。Information、Readers Advice、Reference、これらすべての相談を担当するのがLibrarianです。Librarianは、窓口とReading Room or cornerを兼務します。「Reading Room or corner」は四方を蔵書に囲まれた中に机、椅子があり、Reference Bookと一般書を自由に利用できます。文字通り、市民の書斎です。ヴァリエーションはあるけれども、これが基本的構成です。絶妙なバランスですね。

## 図書館から 席をなくしたことに ついての二つの考え

斎藤● そういえば、朝倉さんはあだ名があったそうですね。朝倉● そう。この前、府中図書館に用事があって行って、いろ

いろな話をしていたら、あなたにはいっぱいあだ名がついてたというわけ。それでその代表的なのが席タバ子っていうんだって。わしも初めて知ったな。なんで？と聞いたら、わしが部屋に入ってきて、いすに座るとすぐタバコを吸って、たちまち煙でいっぱいになってしまっただって。だから席タバ子（笑）。そうそう、席といえば、当時、読書席も図書館の必須要素と

思っていた。それで、アメリカに行った時、調べてみようと思っただんです。すると、大きな図書館はもちろん、どんな小さな図書館でも席は必須の要素でしたね。あとで資料を見ると、シカゴの新中央図書館なんか、パンフレットに書いてある席数は、三六〇〇。それから、ニューヨークにあるブランチ・ライブラリー・システムの席数は一三三三。この数字をピタッと覚えてるのは、府中の分倍河原で新田義貞が勝った合戦があったのが一三三三年。それとピタッと合ってるから覚えた。アメリカでは小さな図書館まで

「シート36」とパンフレットに載せているんです。これらの席はすべて書架に囲まれ、その図書が自由に利用できるようになってる。

図書館で青春時代を送り、至福の時を過ごした人たちは、図書館に理解がある行政をします。かつて、日比谷の図書館は「局」相当でした。日比谷の館長が局長職ということ。都の館長には専用車があった。わしは杉さんの鞆持ちだったから、だいぶ乗りましたよ。

ところが席のなくなった図書館しか知らず、至福の時を知らない人たちが今日……。わしは泣けて泣けてしょうがない。

このわしを助けてくれているのが、近くにある杉並の高円寺図書館です。昭和四二年（一九六七年）開館で席が一二〇ある。そして、すばらしいのはこの席で全館の蔵書を自由に利用できることです。アメリカ式なんですね。わしは今、業平にのめり込んでこの図書館に通っています。そして、晩春の至福の時を過ごしているんです。帰りにはちゃんと本を借りてね。



## 市民とスタッフと 長に恵まれた 府中館長時代

堀● 朝倉さんは昭和四六年から五〇年代いっぱいくらい府中市の図書館長をされていたわけですが、その一五年間の図書館のつくり方をもう少し詳しくお話しいただけますか。

朝倉● 当時、府中はちょうど文化センターというのをつくり始めていて、その中に図書館もつくっていったんです。この建設計画は、文化センターを七館作るというものでした。新館の準備は図書館の現職員でしました。最初、昭和四六年（一九七一年）につくり、その後も毎年一館ずつつくっていくんです。昭和四八（一九七三）にいたっては年に二館もつくられました。だから館長もスタッフも、とにかくやらなくちゃいけないわけだね。そういう疾風怒濤の時代でした。

その時、真剣に話し合ったのは、中央館と地区館、地区館同士、それからBNJはどういうふう運営していけばいいのか。建設

が終わったあとの総合的な運営をどうしたらいいのかというのが大きな課題となりました。その時わしが提案したのは、各館の代表と中央図書館のめばしい職員でプロジェクトチームをつくって、将来の一〇カ年計画をお互いに話し合っただけです。これはよかったですね。館の業務が終わってから集まってやったわけ。そんなことはとんでもないとなるのが普通かと思うんですけど、みんなやる気満々ですから、業務を終えてから中央図書館に集まって、それから一時間か二時間話し合った。それで一年経ってまとまったんです。

昭和五年（一九八〇年）刊行。タイトルは『信頼される図書館を目指して』。序文はわし、本文はスタッフ、最後のまとは図書館を出ていった松本三喜夫さんが書いた。

一年間かけて、一〇年先までの図書館のことを話し合ったので、府中の図書館の運営が一本化されたわけです。図書館職員が対する考え方にも違いがなかった。誰に聞いても、府

中の図書館のいき方というのはこうだ、といえたんです。当時の府中の図書館職員は府中の図書館の哲学をみんな持っていた。わしは、府中の図書館へ行ってよかつたなと思えることが三つあるんです。

一つは市長に恵まれたこと。市役所で市長に会うと必ず、図書館はだいたいようぶか、補正で出していいよ、とそれが挨拶（笑）。だから何回も補正でもらいましたよ。ある年は補正を二回くらいもらつたのかな。それはそれはよき市長に恵まれたね。

二つ目は高原さんはじめ優秀なスタッフと一緒に仕事が出来たこと。三月に補正予算の本を買わなくてはいけない時、新館準備の時、府中のスタッフは黙々としてやり遂げました。とんでもないとか反対なんか一言もないです。わしはただただ頭が下がらばかり。全員、そういうライブラリアン・シップに燃えたスタッフでした。この時のスタッフが今府中の図書館を背負っています。

高原さんには多くのことを学びました。恩師です。図書館実習

生と懇談した時、わしが「図書館の仕事がメシより好きにならなくっちゃ」といったら、髙原さんがすかさず「好きじゃダメ。図書館に惚れなくっちゃ」と。これ以上のライブラリアン・シツプの言い方がありませんか。

三つ目として、すごい利用者をお一人紹介します。それは、榎佐知子さん「注18」です。榎さんは、超難解な東洋医学の原点『医心方』（全三〇巻、九八四年）を独学で三〇年かけて二二巻まで現代語訳しておられます。最初の頃、府中の図書館をだいぶ利用されていました。わしもいろいろと話をしたことがあって、国会図書館の案内をしたこともあります。『医心方』より一足先にこれも難解な医薬書『大同類聚方』（全一〇〇巻、八〇八年）を全訳し、菊池寛賞を受賞された。この授賞式と祝賀パーティーにわしも招待された。図書館人冥利に尽きましたね。

## 石碑に刻まれた 「温故知新」の文字

堀● 朝倉さんが府中にいらっ

しゃったのは、大國魂神社の中に今もある中央図書館ができてからですよ。

朝倉● わしが行った時は当然もうできていた。大國魂の境内の中にできたのが昭和四三年（一九六八年）、わしが府中に行ったのが四六年（一九七一年）です。

堀● 大國魂神社の中の中央図書館というのは、今はだいぶ過密になってしまいました。書棚がギツギツにきつくなつてしまつたり、Vの貸出しを始めて席がどんどん小さくなつてしまつたり。だいぶ変わつてきてしまつただけでも、昭和四〇年代から五〇年代頃の大國魂神社の中にあるあの中央図書館のたたままいというか、隣には渡り廊下で結ばれた郷土館がある、あの図書館のイメージというのは、図書館とはこういうものだよなとあこがれを抱かせるものがありました。

そういう意味では、貸出しを中心にした『中小レポート』以降の図書館の感じとはだいぶ違う図書館が、昭和四〇年代になつてからもつくられたということ

ですよ。割合に席がゆつたりしていて、いろいろ調べものをする本も古い資料もたくさんある。窓からは木立ちがながめられて。確かに朝倉さんが館長で来られたのはそのあたかもしれないけれども、お話しされていた図書館とイメージが重なるような感じがするのですがいかがですか。

朝倉● ええ、府中の図書館というのはわしのイメージにだいぶ合つた。例の三要素がそろつていた。オーソドックスといつていいかな。だから時代がどんなに変わろうが、このままやつていけばいいとわしは思う。

図書館というのは歴史的な歩みと一緒に積み重ねだと思ふ。やはり物事というのは哲学的に考えれば、変わるものと変わつちやいけないものがあるわけね。この見極めが大事ですよ。古いものを切り捨てて、何か新しいことをやればいい、との考え方があつた。これじゃ、下手すれば変わつちやならないものまで切り捨てることになつてしまふ。これを見極めるのが温故です。ビルを建てるため貴重な

文化財を平気で壊しちゃう。これは伝統文化の破壊です。ローマ、ロンドンを見れば分かるでしょう。古いものが大切にされている。

何か新しいことをやればいいというの、それは温故知新の温故のない考え方です。温故があれば、そんなことは考えませんよ。バイブルは目で見るよりも心で見ると。心で見ればよく見えます。この心を培うのが温故であり、図書館ですよ。府中の図書館で偉いなと思つたのは、誰があの石碑を置けといつたのか知らないけれど、北側の一角に「温故知新」と黒のみかげ石に彫り込んであるわけ。あれを見ると、わしは涙が出る（笑）。

## 佐藤政孝さんと した仕事

堀● 朝倉さんが日比谷図書館時代、一緒に仕事をされた佐藤政孝さんが二〇〇四年六月十七日に急に亡くなつてしまいましたよ。そこで、佐藤さんはこんな方だったということを通じて伝えていただけないでしょう



蛭田廣一(ひるた・ひろかず)  
1975年(昭和50)小平市図書館司書として  
小平市に勤務。地域資料・古文書担当として  
現在までに『郷土資料索引』3冊、  
『古文書目録』など19冊、  
『小平市史料集』19冊を刊行。  
現在は小平市中央図書館館長補佐兼調査係長

か。

朝倉●佐藤さんは、九州の大分の出身だった。細かい経歴とかは知らない。昭和二四年(一九四九年)に日比谷図書館に司書の資格を持って入っておられます。だから戦後の東京の図書館をずっと背負ってこられたといつていいかな。東京の図書館の歩みを本でまとめられた『東京の図書館百年の歩み』泰流社、一九九六年)。これは佐藤さんだけでしよう。司書といつても、東京都の人事制度は図書館の中で、ということにはまだなつてなかった。佐藤さんというのは昇格するたびに行政のほうへ行って、一つ仕事をしたら図書館に帰ってくる。それ

を繰り返されていた。だが頭の中は図書館のことだけ。芯からのライブラリアンでした。

佐藤さんの仕事を一つご披露しますと、図書館振興のプロジェクトチームの事務局長をやっていたら、佐藤さんが中心になってミーティングをやっている。ながらレポートをつくつていったんです。事務局のミーティングをやつて帰る時は、もう夜の八時か九時頃になるわけです。それでも、明くる朝になると、佐藤さんがまたさつそく夕べの続きをやるという。配られるレジュメを見ると、夕べ話したことがきちんとまとめてあるんです。だから、むしろはそれを見てオーケーといえは、それで

できあがり。その繰り返してした。

わたしは不思議でしょうがない。あんな遅くに帰つて、いつこんなものを書くんだつて、佐藤さんに聞いた。そうしたら、私は帰つたら何時だろうが、一杯やるよというのね。それをやるとすぐ眠たくなるんでぐつすり寝る。そして、夜中の一二時から一時には必ず目を覚ます。それから出勤までがんばるんだと。だから一日の間に人の二倍の仕事をしていくわけです。それを聞いて、やはり佐藤さんはすごいなと思つた。そんなにできるんだつたら、わしもいつちよ佐藤さんを見習わなくちゃということ、わしも

帰つて一杯やつた。いい気持ちになつて、寝た。それで夜の

一二時か一時に起きるつもりだったのが、いつもの通り朝の七時にしか目が覚めない。だからやはりわしのような凡人のできることじゃないと悟つて、そういうことはしなくなつてしまった。佐藤さんは、人の倍の努力家なんです。ですから本も何冊も書いておられる。プロジェクトチームの話もいろいろあります。杉さんが日比谷図書館長になられた時に、佐藤さんが日比谷図書館の現状と将来計画を話したわけ。すると、杉さんが、抽象的には分かる気がするんだけど、具体的には分からない、一〇カ年計画みたい

なのはできないんですか、といわれた。それで佐藤さんがまとめたのがこれです。

齋藤 ● 『東京都立図書館の整備充実計画』（昭和四四年九月一日、東京都立日比谷図書館）ですね。

朝倉 ● これは佐藤さんが一人ですとめた。あまり表に出ていないけど、佐藤さんは東京の図書館の発展のためには見えないところで大奮闘しているわけ。佐藤さんがいたから、今の都立図書館が維持できたといっても過言ではない。表に出てワイワイやる人じゃない。非常に謙虚な方だったんです。

一〇カ年計画をまとめた時も、杉さんに、この前おっしゃったのこんなふうにできましたよと持って行ったら、杉さんが喜んで、すぐ美濃部さんのところにすっ飛んで行かれた。そうしたら美濃部さんが、都立図書館はこれで結構ですよ、区立とか市立の図書館はどうなんですかと聞かれた。それはまだだと答えたら、さっそくそれをやりなさいと。

それを受けて佐藤さんが中心に

なって企画と相談しながら図書館振興策のプロジェクトチームをつくりました。この振興策も佐藤さんが同じようにつくられた。もちろんこの時は図書館側の委員としては清水正三さん

「注19」、前川恒雄さんも一緒だったから、清水さん、前川さんのご意見もいくつかは入っているんだけど、具体的にまとめたのは佐藤さん。プロジェクトのレポートができて、それをまた美濃部さんのところに報告した。その時は広田という社会教育部長と、杉館長、それから佐藤さんとわしとの四人で行ったんです。真正面が美濃部知事で、両脇に企画部調整局の主幹がずらっと並ぶ。そのど真ん中に四人が腰掛けて報告する。

美濃部さんは、また喜んで、それではさっそく中期計画に取り組みなさいと、企画調整局の主幹にすぐ命令する。その明るく年から補助金が出るようになってた。だからやはり図書館行政がうまくいくというのは、長が図書館に理解があるということが一番理想的です。長の理解があ

れば、図書館行政というのはどんなものも進む。

## 今、どうやって 司書職制度を実現 させるか

齋藤 ● 蛭田さんは、いかがですか。何かお聞きしたいことは。

蛭田 ● はい。やはり朝倉さんがずっとこだわってこられた、あるいは一番大事にされてきたのは司書職制の問題だと思えます。私は今の多摩の図書館は非常によくない状況にあると思っています。朝倉さんの時代は、かなり専門職館長さんたちがおられた時代だと思えます。その専門職館長さんたちが辞めたあと、二代目、三代目の専門職館長を続けているところもありますが、ほとんどは、そうでなくなってきました。

それから、専門職館長さんたちの時代にかんがりの司書職が採用されていますが、その人たちは、実はほとんど私と同世代かもう少し上の世代の人たちです。ということ、あと一〇年もしないで、司書職としてこれまで働

いてきた人たちが一斉に辞めてしまふような状況が出てくるだろうと思うのです。

文部科学省は望ましい基準〔注20〕をつくりました。その中では、館長が司書職であることが望ましいと謳われているんです。にもかかわらず、去年（二〇〇三年）の図書館大会では、今までは図書館には司書が必要だ、専門職館長が必要だといってきた文科省が、指定管理者制度を認め、図書館運営が外部委託できるといふ流れになつてきている状況なのです。

この波及効果というものは、ものすごく大きいと思います。

経済状況も確かに悪いです。ですが、司書職制度を確立して図書館運営をしていくことが理想だという朝倉さんの主張が、このような国の政策、あるいは多摩の現状の中で、どうも実現が難しい状況にあるような気がします。

先ほど、それぞれ自治体でがんばればよいという考え方を示したのですが、指定管理者制度の流れの中できちんと説明して、専門職制がいいんだ

ということを説明していけるか。今いる職員たちが、どれだけの力を発揮していけるのか。文化行政が国も、地方自治体も非常に弱くなつてきている。そんな現状だと思います。その中でどうしたらいいのかということをお伺いしたいです。

朝倉● わしですら図書館をとりまく状況の厳しさがわかりまふ。蛭田さんが多摩地区の司書の館長と後継者の問題を綿々と話されましたが、わしもわがごとくのように受け止めています。これを解決するには、わしの頭じゃ司書職制度の設置しか考えられません。

すでに制度を設置されている先進市でも同じ悩みがあるんですか。あれば角度を変えて考えなければならぬですが、なければ設置ですよ。

とすれば、そこに焦点を絞つて考えを進めるべきではないですか。有志がまず燃えることですよ。できるだけ多くの先進市の設置の結果、現状把握、設置の有無による館のあり方の比較などの資料を作成し、館長と話し合つて何としても館長に館サイ

ドに立つてもらふ。館長さんとスタッフが一体となつて進める。このことが最も肝要なことですよ。館長は自館はもちろん館長協議会でも活躍されることになりまふから。

とにかく一市でも実現することです。多摩地区の波及効果は早い。原点は燃えたスタッフの皆さんの熱と英知ですよ。

## ライブラリアンの良識で 危機の時代を 乗り越えてほしい

蛭田● その点でいえば、昨日ZETの教育テレビで『デイスカパー図書館2004』という番組を放映したんです。鳥取県知事は鳥取県に専門職制を採用しようということを実践していまふ。

まさにそれは今のお話にあつたように、トップに理解があれば、いい政策が実現でき、いい人材が集まるといふ実践事例ですよ。浦安の常世田良さんも出ていて、浦安の実践事例が紹介されていた。他にも立川とか滋賀県愛知川町の図書館活動、ある

いは沖縄の図書館なども紹介された。テレビとかラジオを使つた宣伝効果ということも、政策的に打つて出ないとダメな部分もあるのかなと思います。

司書の人たちがまじめに仕事をするだけでは、なかなか声が届かないから、いろいろなメディアを使って宣伝をしていく、そういう手法もあつていいのかな。そんなふうを受け止めました。この番組は、すごくいい番組になつていると思います。人を位置付け、制度として図書館を活性化していくことによつて、住民に対していいサービスができる。そんな気持ちにさせられる番組でした。

朝倉● 偉い。よい話を伺いました。そういう発想はよいですね。実はまったく同じ考えを日比谷の三年生の時に発表したんです。「マス・メディアの利用による図書館振興に関する一考察」というもの。

このあらまは、全国の都道府県の図書館協会で、英知を絞つてテレビの三〇分番組の構想をつくつていただき、ZETの各局で番組を作成してもらつた

うものです。これを週一回土曜日か日曜日のゴールデンタイムにNHKの教育放送で全国放送する、各協会の番組構想は、週一回で一年で一周りする、というものです。放送法では、こういうことをやれという規定がある。これを使わない手はありません。今でもこの考察は立派に生きています。実現できればとずーっと考えている。

松江の公共図書館部会の大会で発表したのがこれだったんです。今こそ実現できれば絶大な効果がありますよね。蛭田さんが先ほどいわれた通りです。

アメリカの放送法では、図書館に最高三〇分まで無料で番組を提供しなさいと。図書館の広報担当がその番組に出演している。そいじゃ、「街を歩くとアツ図書館のおじさん」といわれるのではと聞くと、まさしくその通りと(笑)。

やはり良識あるライブラリアンがここで立つべきです。それで負けたらしょうがないです。力の問題だからね。だけど、

やるとなれば、どこまでやるべきですよ。これがライブラリアンの命ではないですかね。図書館は盛り上げが大変。やはり人生劇場です。わしはそう思っていますよ。もうわしは現役じゃないけれども、考えていることは図書館の明日、なんです。

朝倉● これ、『図書館人生劇場』  
「注21」、知ってたかな。

堀● はい。

朝倉● 知ってた。あはは。こりゃ恐縮(笑)。これは今だからはつきりいうんだけど、この主人公は、稲城市の図書館の元館長、広瀬利保さんなんです。

齋藤● そうなんですか。

朝倉● それで、実は歌詞はわしが考えた。でも、モデルは広瀬さん。この人生劇場の歌の文句も自分でだいぶ気に入ってるんだけどね。「図書館がすたればこの世は闇さ」とかね。もう本当にこの通りだと思っね。

一番最後にある『図書館人生小唄』は、日比谷図書館の北村泰子という女性の課長さんが三番をつくっておられて、自分が退職する時、それを歌われたんです。三番だけじゃさびしいじゃ

ないかということ、一番、二番、四番、五番はわしがつけた。まさしく今のわしの人生のとおりです(笑)。

歌が人間を元気にするには一番いいと思ってるんです。だから、どなたかすばらしい図書館の歌をつくっていただきたいですね。

## 多摩地区図書館へのメッセージ

堀● 最後に、ぼくらも含めて多摩地域の図書館へメッセージをお願いします。

朝倉● スタッフの皆さん、わしらがやってきた頃の多摩地区の図書館はバラ色でした。今日いろいろ伺いました最大の課題は司書職制度でしたね。だが状況は日に日に厳しくなってきました。こういう時、何をなすべきか。

心の中に図書館の理想の旗を掲げためかせライブラリアン・シッパをますます發揮され、多摩地区図書館の伝統である燃える時は燃えるをふまえて、燃えてください。そして想いは同じ腹か

らと互いに手をとり励ましつつ、その英知を絞り、館長さん方と一緒に課題に当たってください。「成否をなぞかあげつらう」です。それが人生じゃないですか。

館長さん方へお願いします。多摩地区の図書館の一オビーが館長さん方へ失礼なことを申し上げる失礼をお許しください。館長さんにはご周知のことでありますが、今日、多摩地区図書館の最大の課題が「司書職の設置」と思いました。今は司書の資格は持っていますが身分は主事です。制度が実現すれば名実ともに司書となり、生涯にわたって業務に専念できるので、それではじめて図書館はその使命を全うすることができま

す。すでにこの制度を実施して、めざましい活動をしている市があります。それは司書が業務に専念できるからです。その市民は将来にわたって幸せだなとつくづく思います。

今、スタッフは頑張っています。望んでいるのは身分の安定です。制度ができて給料はその

ままで、決して、市の財政に一円のご負担もかけません。晴れて、名刺の肩書きに「司書」とつけば、もともと使命に溢れた人たちですから、力はかならず倍増します。市民の幸せも市民の行政の理解も得られます。

そこで、この制度の設置は行政区の人事でなされます。今多摩地区の多くの館長さん方は行政のベテランと承っております。この制度の推進に当たって館長さん方は、行政と図書館の「要」にあられます。館長さん方が「よし」と燃えていただければ、必ず実現すると確信しています。どうか人生意気を感じていただければと切望いたします。お進めになるに当たって少し話させていただきます。

一つは自館です。スタッフは待っています。スタッフと一丸となつて要望書とよき資料をまとめられ当局へ。

二つ目は館長協議会です。この協議会に館長さんを代表に、委員は各館からのベテランスタッフによる司書職制度推進小委員会を設置していただき協議会と小委員会が一丸となつて要望書

とよき資料をまとめ、それを市長会、教育委員会、各市長へ要請していただけたらということうです。

多摩地区はずばらしいところですが、かつて、図書館の建設時代、一市でもできると「じゃ、おらが市でもやるか」とたちまちにして全市にできて全国の注目を浴びました。今回も全く同じです。多摩でこの制度ができれば「多摩を見習え」と全国の図書館の発展にも繋がるのです。館長さん方の実力を発揮していただくいい機会と思います。是非とも実現してくださいませう切望いたします。

齋藤●よく分かりました。最後に何か一言あればお願いいたします。

朝倉●わしがかねがね思っていることを一つ。二〇世紀は学校の世紀、二一世紀は図書館の世紀と思つとつた。ところが期待していた世紀の幕開けは早々からかんばしくない。

先哲の言葉に「ミネルヴァ(知恵の女神)の梟(使者)は黄昏を待ちて飛び立つという」というのがあります。新しい世紀は

黄昏染めてきました。飛び立つてください。

齋藤●非常に長い間ありがとうございます。ございました。

朝倉●いや、こつちのほうこそありがとうございます。図書館の青春時代に還らして下さつたものな。

『す・ぼん』さんのご発展を！  
齋藤●本当にありがとうございます。ました。

(二〇〇四年七月五日)

### ●インタビューを終えて

多摩地区との私の縁は図書館に就職するために移ってきてからです。下宿してしばらくして、ああこの地には休みに散歩する大きな川がないのだなあ、と気がつきました。所帯を持つ時には多少不便でしたが府中市のはすれの多摩川土手の近くを選んだ暮らしていた事があります。戦後に市制が敷かれた小さな市が多い中で、府中市は歴史ある地方都市の趣きでした。

朝倉さんには私は初めて親しくお話しさせていただきました。二十数年の昔、市町村図書館長協議会主催のソフトボール

大会があつて、河川敷のグラウンドでポロシャツ姿でピッチャーをやつてらした朝倉さんを思い出しました。全くお変わりない印象です。

「図書は情報か、魂の結晶か」「図書館は貸出しか」「読書席の問題」「専門職制度の問題」「振興政策」「都立と市立の関係」。課題は全く変わっていない事に驚きました。むしろ新鮮な感じがしました。想い続けておられた図書館への情熱と痛恨を真つすぐに述べられた事に変感謝しています。

市立に移られてからの都立図書館との関わり、府中市において早い整備だった本館と分館の関係、職員配置や本庁との関係など、府中での具体的な経験をひとつひとつ込んでお聞きしたかった気もしています。

(堀渡)

